

あなたの
献血の先に

「贈られたのは『命』でした!」 輸血を受けた方から感謝の声



ローランド 純代さん

善意の血液で、私は今生きている

「今日は赤を入れるからね」。先生のそんな言葉で始まる赤血球の輸血。ぐったりしていた体に、みるみる力が湧いてくるのを自覚しました。こうした輸血治療を入院から退院までの約9カ月に何十回受けたでしょうか。
急性骨髄性白血病と診断されたのは2年半前の6月、55歳の時でした。すぐに抗がん剤治療が始まりましたが、私には抗がん剤が効かず、残された方法は造血幹細胞(血液を造る元となる細胞)の移植だけ。骨髄移植のドナーさんが見つかるのを待つ余裕がないほど状態が悪化していた私には、待ち時間が少なくて済む「さい帯血移植」[※]が9月に行われることになりました。
非寛解(血液のがんが残っている)での移植のため、体

酸素を運ぶ赤血球や、止血する役割をもつ血小板を数日おきに輸血する必要がありました。移植の前には、「前処理」といって抗がん剤で造血機能を一度破壊し、骨髄を空にしなければなりません。そのため、移植後も造血機能が回復するまでの間、何度も輸血をいただきました。
善き医療チームに恵まれた方もありますが、献血をされた方の善意で私は生きています。自分自身は献血をしたことがなかったので、なんて罪深いのだろうかと思いました。私は、血小板が赤くないことも知らなかったんです。今は私自身(輸血歴があるため)献血ができませんので、代わりに夫が献血に行ってくれています。感謝の言葉しかありません。そして、さい帯血を提供いただいている

全てのお母さんと赤ちゃん、同意してくれたお父さんに、とりわけ御礼を言いたいです。
骨髄移植を受けたある男性に「生きていることが、ドナーさんたちへの恩返し。何も特別なことをする必要はない。生きてさえいればいい」と言われたことがあります。この言葉がすごく心に染み入っています。小さなことですが、朝起きて、食事ができて、隣には夫がいて。あの時、善意の方からもらった血液で、私は今生きている。ありがと、という気持ちで、一日一日をかみしめています。
※さい帯血移植=出産時に赤ん坊からへその緒(さい帯)を切り離した後、さい帯と胎盤の中に残った造血幹細胞を多く含む血液(さい帯血)を採取。必要な処理をした後、さい帯血は冷凍保存され、移植に活用されます。
骨髄バンク・さい帯血バンクについてはこちら www.bmdc.jrc.or.jp

難病の慢性活動性EBウイルス感染症と診断されたのは、27歳だった2007年。病気とは無縁の人生で、タフが自慢だっただけにショックでした。有効な治療法がなく、唯一の可能性といわれた骨髄移植でさえる確率は3割。幸いドナーが見つかり、手術も成功しました。ドナーの方に直接お会いすることはできませんが、感謝の言葉しかありません。
骨髄移植の際には輸血も受けました。(造血機能が低下している)移植後は3日周期でものすごく気持ちが悪くなりました。そのたびに輸血を受け、ビクビクするくらいスッキリして力が湧きました。以前は、献血した血液の行き先を気にかけることなどありませんでしたが、病気になって初めて分かりました。「~型の血液が何人

分足りません」という呼び掛けは、僕みたいに輸血を待つ人がいるからだ。患者は献血がなかったら、命をつなげることができず亡くなってしまいます。ただ、それは誰にでも起こり得ることで献血や骨髄ドナー登録は当たり前のお互い様の助け合いだと思います。
その思いから6年前から「Snowbank pay it forward」の取り組みを始めました。スノーボードを通じて、骨髄バンクや献血の大切さを知ってもらうイベントなどを開催しています。
初年度は理解を得ることが難しかったのですが、回を重ねるごとに参加者の意識が変わり、協力者を増やすためのアイデアもみんなが考えてくれる。若い世代の献血ばなれが問題になっていますが、献血や骨

髄バンクドナー登録は命を救う行動で特別なことではないと分かれば、みんな立ち上がってくれます。献血やドナー登録が「カッコいいこと」「当たり前なこと」と認知されれば、若い人の参加はもっと増えるはず。病気を体験したからこそ、そんなイメージづくりに挑戦していきたいと思っています。
「支えがあるから頑張れた」
妻・荒井育子さん
彼が病気の診断を受けた後、「もし一致しなかったら…」と思うと、怖くてドナー登録に足がすくみました。そんな私の背中を押してくれたのは、全国のスノーボード仲間でした。みんなが骨髄ドナー登録に協力してくれ、献血や募金などで支えてくれた。みんながいたから彼も頑張れたのだと思っています。

今、輸血を待っている人がいるんです



プロスノーボーダー 荒井 daze 善正さん



土田 大介さん

輸血も骨髄移植も
善意で支えられている現実を知った

献血をしてくださる方って心の温かい、素敵な方ですよね。そんな素敵な方々が大勢いることをすごくうれしく感じています。実は今も週3回、採血検査を受けていて、赤血球や血小板の値が悪くなったら輸血をしてもらっています。僕自身は針が苦手で、検査で採血をかけることもなく献血される方がいる。本当に感謝です。
僕が急性骨髄性白血病と診断されたのは22歳の時でした。初めは、抗がん剤のみで治療し、半年ほどで無事退院できました。2年半で再発しましたが、姉から提供してもらった末梢血幹細胞(造血幹細胞)の移植で、その時も3カ月で退院できたのです。ところが1年半後に2度目の再発。医師から骨

髄バンクへの患者登録を勧められ、ドナーさんからの骨髄移植を受けました。そして3度目の再発が今回。昨年10月から入院治療を続けています。
病気になる前は、骨髄バンクのことも献血のことも何も知りませんでした。自分には関係ない。「輸血は受けられて当たり前」という意識すらありませんでした。でも自分がその提供を受ける立場になったことで、骨髄移植も輸血も大勢の人の善意で支えられている現実を知りました。バンクの普及へ向けボランティアとして活動されている方々とも出会いました。病気がなければ、一生知らないまま、出会わないままだったはずでした。
そう思うと、この経験を無駄にしちゃいけない。僕にもできることがあるはずだという気

持ちが湧いてきました。また、治療では相当きつい場面も経験してきました。治ってほしいにすぎないけど、悔しいくらいしんどかった(笑)。病気で与えられたこうした経験を、逆に強みにしていきたい。そんな思いから昨年1月、SNSを通して自分の病気を公表することを決めました。最初は不安でしたが、応援してくれる人も増え、病気で闘っている仲間とも知り合いになりました。
再発はすごくショックでしたが、下を向いていても状況は良くならない。抗がん剤の種類を変えたり、さい帯血移植を受けたりするなど、いろんな治療法にチャレンジするつもりです。そして、病気を克服する自分の姿を発信することで、同じように病気で苦しむ人の力になりたいと思っています。

「救命救急に 輸血用血液は欠かせません」

東京都立墨東病院 輸血科部長 医学博士 藤田浩さん



当院は、隅田川以東では、都内で唯一の救命救急センターが設置されています。日々、救急搬送患者さんが運ばれてきますが、とりわけ重症の方の受け入れが多く、交通事故や転落事故などによる大量出血ですぐに緊急手術を必要とするケースもあります。人間の体には成人

で約5Lの血液が流れていますが、それと同じくらいの量の輸血を行うことも珍しくありません。こうして使用する輸血用血液は当院だけで年間およそ献血者7000人分。この血液による輸血療法が大勢の命を救っています。
がん患者さんや血液の病気の患者さんの治療に輸血は

欠かせませんが、治療計画に応じて輸血量の見通しがぎまぎます。一方、救急患者さんの場合は突発的な大量輸血を余儀なくされるケースも。実際に輸血用血液が足りなくなったことはありませんが、在庫ギリギリになるなど綱渡りで乗り切ることもあります。
また、医薬品と違い、血液は工場で製造ができず、献血によってしか確保ができません。且つ、その保存期間が極めて短い。ですから当院では、新人医師への教育を含め、輸血用血液の適正使用に力を入れています。医療従事者が輸血用血液を安全かつ有効に使うこと、そして最大限に活用することで、献血協力者の志が患者さんに届けられると考えています。

数字で見える血液事情

16~69歳

200mLの全血献血が可能な年齢。400mL献血は男性17~69歳、女性18~69歳。成分献血は血漿が男女18~69歳、血小板が男性18~69歳、女性18~54歳。ただし、65~69歳までの方は、60~64歳までに献血の経験がある方に限ります。その他、国が定めた基準などにより医師が総合的に判断してお願いしています。

488万人

平成27年度の献血者数。うち男性が約349万人、女性が約139万人。年代別では、40~49歳からの協力が28.9%を占めていて、一番多くなっています。

151カ所

献血ができる場所の数。その他、献血バスや各種イベントなどでも受け付けています。全ての献血ルームで骨髄バンクへの登録もできます。

更新情報はこちらまで。
<http://www.jrc.or.jp/donation>



赤血球 21日間
血小板 4日間

輸血用血液製剤有効期間。長期保存することができないので、継続的に献血をお願いしています。

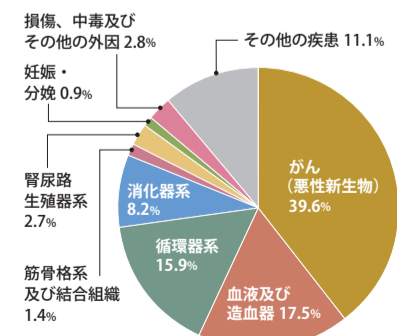
3000人

輸血を受けている患者さんの1日あたりの平均人数。年間約1900万本の血液製剤が医療機関に供給されています。

39.6%

輸血は事故による大量出血の際にも行われますが、39.6%と最も多いのが「がん(悪性新生物)治療」への使用。抗がん剤治療により造血機能が抑えられ、血液を十分につくることができない場合などに行われています。

疾病別輸血状況



(平成26年東京都輸血状況調査集計結果)

